

九州支部

44%, 2 生率12%, 3 生率 6 %であった。長期生存が期待できるのは、stage I 又はIIの症例、扁平上皮癌、左側肺摘例、相対的非治癒切除術以上の根治性を得られることなどである。

17. 8年間原発不明であった気管支カルチノイドの一例

熊本市民病院呼吸器科

福田浩一郎, 岳中耐夫

樋口定信, 志摩 清

症例は75才、男性。主訴は皮下腫瘍。その切除標本から低分化腺癌と診断され、原発巣検索するも不明であった。5年後、カルチノイドと診断、さらに3年後気管支原発と判明した。皮膚、骨、胸膜などに転移を認め、少量の抗癌剤や放射線治療は無効であった。また、気管支病変は、その転移巣に比べ小さく、発見し難かった。悪性の経過をとる気管支カルチノイドに対する早期診断や治療対策の確立が必要と考えられた。

18. 血痰外来における肺癌症例の検討

熊本地域医療センター呼吸器科

深井祐治, 古井博明, 前田洋助
千場 博

当センター血痰外来開設の昭和57年10月1日より昭和61年5月13日までの約3年8ヶ月に血痰及び喀血を主訴に血痰外来を受診した患者は514例あり、うち原発性肺癌36例(約7%)が発見された。今回この36例の肺癌について年令、性別、組織型、発生・浸潤部位、X線像、病期、T因子について検討した。尚、原発性肺癌36例中2例が肺門型早期肺癌(扁平上皮癌)であった。

19. 試験開胸例の検討

長崎市民病院外科 中田剛弘

前田潤平, 天野 実, 林田政義
同 内科 荒木 潤, 伊藤直美

中野正心

当院にて過去10年間に経験した試験開胸例について検討した。切除不能原因の内、最も多いのは播種性変化で腺癌に多くみられた。手術前後の病期では、T-N因子共に過小評価する傾向がみられた。試験開胸に終った症例の中に、生存期間の長いものが1例あり、今後Cisplatinを中心とした集学的治療を行うことにより、更に生存期間の延長も期待される様に思われた。

20. 肺癌の長期生存例による予

後因子の検討

熊本大第1内科 田中不二穂

坂田哲宣, 興梠博次, 中嶋博徳

吉田和子, 本田 泉, 菅 守隆

杉本峯晴, 安藤正幸, 荒木淑郎

肺癌の予後を良好とする因子を検討する目的で、熊本大学第1内科において、昭和45年から昭和55年の間に入院した肺癌患者の中で組織型の明らかな280例中、5年以上生存した21例について検討した。組織型に一定の傾向はなく、臨床病期はI期19例、II期2例。治療は手術19例、放治2例。早期発見と手術が最も重要な予後因子であり、集団検診は早期発見に貢献していると考えられた。

21. 肺プラズマサイトーマの1例

熊本市民病院呼吸器科

樋口定信, 岳中耐夫

福田浩一郎, 園田英一郎

志摩 清

髓外性のPlasmacytomaはまれな疾患であり好発部位は75~90%が口腔および上気道に集中しており、肺原発例はきわめてまれであり、わが国で現在までに4例が報告されているにすぎない。今回我々は56才男性で咳・痰・嗄声を主訴とし受診

し、BF, BG, CTで肺良性腫瘍を疑い手術を行った。その結果病理組織学的にIgG・λ型の肺原発のPlasmacytomaと診断された1例を経験したので報告する。

22. 肺癌を含む重複癌の検討

国立病院九州がんセンター

呼吸器部 大津康裕, 近藤宏二

緒方充彦, 田中希代子

三宅 純, 竹尾貞徳, 本広 昭

原 信之, 大田満夫

過去12年間に、九州がんセンターでは、肺癌を含む重複癌を83症例経験した。うち79症例が2重癌であり、3症例が3重癌、残りの一例が4重癌であった。

この2重症症例79例について、その臓器別頻度をみると、胃癌が最も高頻度に合併していた。

また先の4重癌と思われる症例は、65歳男性で、3年の間に肺、喉頭にこれらの癌を生じている興味ある症例なので報告する。

23. 当科における同時性肺内重複癌の検討

長崎大第2内科 広瀬清人

福田正明, 谷口哲夫, 早田 宏

木下明敏, 河野謙治, 岡三喜男

道津安正, 神田哲郎, 斎藤 厚

原 耕平

肺癌は増加傾向にあるが、これに伴なって肺内重複癌の報告も散見される。今回、我々は当科における同時性肺内重複癌4例について検討した。年令は全例60才代で、男性4例、いずれも喫煙歴を有していた。組織型は小細胞癌+扁平上皮癌1例、小細胞癌+腺癌2例、扁平上皮癌+腺癌1例であった。診断方法は手術1例、剖検1例、内科的に2例であった。

24. 肺末梢性腫瘍切除症例の術

前診断についての検討

国家公務員共済熊本中央病院